

50種類千匹以上の魚が泳ぐ「むろと廃校水族館」

学校のプールをウミガメやシュモクザメがすいすい泳ぐ。高知県東部の室戸市には、そんな光景が実在する。2005年度末に児童数減で閉校した旧椎名小学校を改修し、昨年4月下旬にオープンした「むろと廃校水族館」。大人にとっては懐かしの学びやであり、子どもにとってはなじみの校舎がいつもと見違える姿でそこにある。ワクワクしないはずがない。オープン直後からメディアやSNSで話題を呼び、来館者は初年度想定の4万人を8月中旬に達成。その後も客足は順調で、10月下旬に10万人、今年2月中旬に15万人を突破した。

廃校水族館は室戸市の施設で、同市に調査拠点を置くNPO法人「日本ウミガメ協議会」（大阪府枚方市）が指定管理する。屋内水槽や屋外プールに50種類千匹以上が泳ぐ。室戸市は漁業が盛んで、地元漁業者が釣った魚を提供してくれるなど地域の協力も大きい。水槽にはアジやサバなど身近な魚もあり、若月元樹館長は「身の丈に合った展示」を心掛けたと話す。だが身近な魚でも、水槽のアクリル越しでなく、太陽の下のプールで見る姿に新鮮な驚きを感じる来館者も多い。「サバってこんなに青いの！？」と。

実は「むろと廃校水族館」は愛称で、ネーミングは若月館長の強い要望による。理由の一つは「廃校」を活用した「水族館」という分かりやすさ。そして、全国的な課題である少子化や学校の統廃合を踏まえ、「廃校の利活用に悩んでいる人たちのアンテナに引っ掛かろう」との意図があったという。既に閉校した室戸市内の小学校から備品を運び、教室の風景を再現するなどのこだわりもある。

「廃校」という言葉にはネガティブなイメージを抱きがちだが、「前向きに捉えるパイオニアになれたのでは」と若月館長。観光だけでなく、教員や学生の研修、児童の遠足など教育利用も進んでおり、集客効果は周辺の観光・宿泊施設、飲食店にも波及している。今後もいっそのにぎわいが期待できそうだ。

高知新聞社室戸支局長・馬場 隼



「むろと廃校水族館」のある高知県東部の室戸市 太陽の下のプールで見る姿に新鮮な驚きを感じる人も多い